

〈資料紹介〉

## 高瀬真卿『いつまで草』(中)

古宇田 亮 修

### はじめに

本稿は、昨年度の当研究所年報に引き続き、東京感化院の創業者として知られる高瀬真卿の日記風随想『いつまで草』(承前)を掲載するものである。

この『いつまで草』は、高瀬が創刊した『刀剣と歴史』の第八五号(一九一七年(大正六)一〇月)から、死去(一九二四年(大正一三)十一月一七日)の月に発行された第一六七号まで、番号の休載を除いて、約七年間にわたり連載されたものである。今回、ここに復刻するのは、一九〇五年(明治三八)の記述に当たる一年分であり、一二回にわたり『刀剣と歴史』に連載されたものである。記載時期の詳細は、次頁に掲げた表を参照されたい。

明治三八年の日記としては、これ以外にも、既に活字化されている「萩村日記 第十五」(『高瀬真卿日記 四』淑徳大学アーカイブズ、二〇一五年、一〇二九頁所収)があるが、『いつまで草』の方が記述が詳細であり、高瀬がいつ、どこで、誰と、何の目的で会っていたというような具体的な行動を知るには、他に代えがたい資料と考えられる。

〈表1〉高瀬真卿『いつまで草』（中）一覧

No.	記載時期	掲載誌（全て『刀剣と歴史』）	本稿頁
36	明治38年1月18日～	第122号，大正9年11月	p. 5
37	明治38年2月4日～	第123号，大正9年12月	p. 9
38	明治38年2月20日～	第124号，大正10年1月	p. 13
39	明治38年2月28日～	第125号，大正10年2月	p. 17
40	明治38年3月30日～	第126号，大正10年3月	p. 21
41	明治38年4月21日～	第127号，大正10年4月	p. 25
42	明治38年5月20日～	第128号，大正10年5月	p. 30
43	明治38年6月6日～	第129号，大正10年6月	p. 34
44	明治38年6月24日～	第130号，大正10年7月	p. 38
45	明治38年7月14日～	第131号，大正10年8月	p. 42
46	明治38年7月29日～	第132号，大正10年9月	p. 45
47	明治38年8月20日～	第133号，大正10年10月	p. 49
48	明治38年9月5日～	第134号，大正10年11月	p. 53
49	明治38年9月9日～	第135号，大正10年12月	p. 56
50	明治38年9月18日～	第136号，大正11年1月	p. 60
51	明治38年9月27日～	第137号，大正11年2月	p. 64
52	明治38年10月6日～	第138号，大正11年3月	p. 67
53	明治38年10月17日～	第139号，大正11年4月	p. 72
54	明治38年10月28日～	第140号，大正11年5月	p. 76
55	明治38年11月8日～	第141号，大正11年6月	p. 80
56	明治38年11月24日～	第142号，大正11年7月	p. 83
57	明治38年12月14日～	第143号，大正11年8月	p. 87

なお、高瀬真卿に関する一次資料の多くは、二〇一〇年に高瀬家の御子孫より淑徳大学アーカイブズに寄贈されたが、『いつまで草』の原本に当たるものは、その中に存在しないため、この活字化された『いつまで草』も一次資料に準ずるものとして貴重である。ちなみに、原本が現存しない理由としては、当時は現在のコピー機のような手軽な複写機が存在しなかったことを勘案すると、『刀剣と歴史』に掲載するために、切り貼りや校正等の編集作業にその原本が用いられ、活字化された後に印刷所からそれらが返却されずに廃棄された可能性が考えられよう。

高瀬真卿は、明治三五年一二月に東京感化院の院長職を長男の紹卿に譲り、明治三八年当時は感化院を直接監督する立場にはなかったが、住まいは院長時代と変わることもなく(旧南豊島御料地、東京感化院境内)、また、当時の職員やかつての職員(例えば、前田兵郎、二月二日の項を参照)、卒院生、元家塾生といった人々との交流を継続していた様子が本稿の記載からも伺われる。

### 参考文献

- 『東京感化院関係史料集(一)』(一六)、『長谷川仏教文化研究所年報別冊』(二〇〇六)一一年。  
『東京感化院関係史料集(二七)』、『長谷川仏教文化研究所年報』第三七号、二〇一三年所収。  
『東京感化院関係史料集(二八)』、『長谷川仏教文化研究所年報』第三八号、二〇一四年所収。  
長沼友兄『近代日本の感化事業のさきがけ——高瀬真卿と東京感化院』(淑徳選書1)、淑徳大学長谷川仏教文化研究所、二〇一二年。  
長沼友兄編『高瀬真卿日記 一〜五』(淑徳大学アーカイブズ叢書一〜五)、淑徳大学アーカイブズ、二〇一三〜一六年。  
長谷川仏教文化研究所・淑徳大学アーカイブズ編『近代日本における感化教育の黎明期——東京感化院と千葉感化院』(平成二三年年度淑徳大学アーカイブズ特別展図録)、淑徳大学長谷川仏教文化研究所、二〇一一年。

(当研究所専任研究員)

凡 例

一、底本には、当研究所蔵本を用いた。底本をデジタル化した上で、マイクロソフト社のWORD上でレイアウトし、版下を作成したため、スキャニング画像やレイアウトの不備は、筆者が全て責任を負うものである。尚、当研究所が所蔵する『刀剣と歴史』（創刊号から三五〇冊余り）は、おそらく一人の所有者の保管に成るものと推測されるほど保存状態が良好であり、その点で作業が比較的容易であったことを付しておく。

一、底本のルビは、著者のものというよりは、印刷所の組版職人が付したものと思われ、誤りも散見されるが、当否の判断が不可能な箇所も多いので、原本通りとした。

一、底本には今日の人権上の観点からすると不適切と考えられる表現もあるが、資料の歴史的価値に鑑み、原本通りとした。

一、小活字で記される日記は、雑誌発行当時（大正期）の高瀬真卿の日記の抄録であり、埋め草として掲載されたものである（二二、三三、四一、四四、六六、七一、七九頁参照）。